

..... は し が き

白鳥の詩をつくろう

日本白鳥の会会長 家田 三郎

この会の会長という名誉ある役割を仰せつかり、設立総会の当日には“宿命”という私自身の卒直な気持ちを申し上げました。

本田清、松井繁氏などの方々が、早くからこうした協議会ともいべき組織づくりを計画されていることは、つとに本田氏からお知らせいただき、私のような者も何かお手伝いを申し上げるべきだと考えておりました。

そして発会の当日、皆々様のお話をうかがって、こんな教示深い有意義な、しかも楽しいお話は今までになかったと思い、参会さしていただいた幸福を思いました。さらにこの会が楽しくつづくことを祈りました。

当日も申し上げたことでありますが、皆々様が、白鳥のように見え、しかもその白鳥が、その土地その土地の「サイゴベン」を語っている。そんな風にも思いました。

日本の人間として、私共は「ツバメ」を大切にしたい思いはありますが、これはどうも、「おかみ」の命令もあつたかのようにも思われます。こんどの白鳥こそ、私ども貧しい者が大切にしようという、いわば庶民からの発想と申し上げてよいようにも思いました。

当日のお話の中に、尾岱沼の何千羽の白鳥が一夜で帰ってしまうとか、環境庁の示した統計によれば、日本には1万6千の白鳥が数えられたとか、これ等は、この会のこれからの運命を語っているようにも思いました。

白鳥を大切にするという事は、恐らく森や林や周囲の自然を大切にすることだと思ふのでありますが、白鳥のくるような田舎の淋しい水辺に住むわれわれが、案外、日本の運命と、かわりが深いものだとも感じております。

そう申し上げては失礼かとも存じますが、貧しきわれわれこそが、いつまでも日本の人びとの心に残る“エトランゼ・白鳥の詩”をつくろうではありませんか。

白鳥に耳をかたむけ盲の子

(医師・水原町博物館長・瓢湖の白鳥を守る会会長・67歳)